

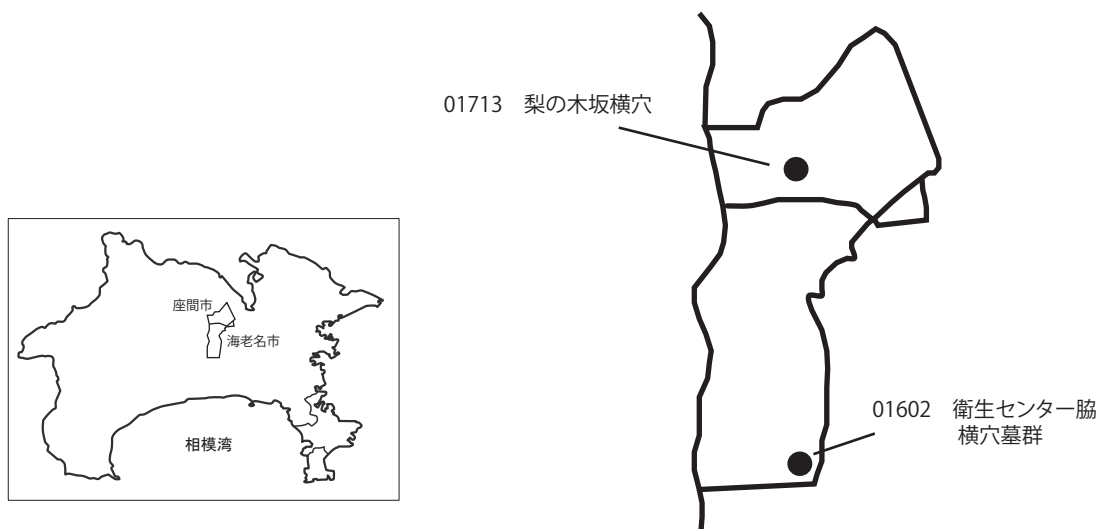
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡（16）

－通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介－

古墳時代研究プロジェクトチーム

例 言

- ・通称「赤星ノート」の神奈川県埋蔵文化財センター保管分の古墳時代に関する項目を抜粋し、報告・掲載していくものである。
- ・研究紀要第23号には横浜市域の12268-1（継続掲載）、横須賀市域の03227・03470・03573番を掲載している。横浜市域の位置図については紀要18を参照されたい。
- ・番号は埋蔵文化財センター年報14～19に記載されている番号に対応している。
- ・執筆分担は横浜市12268-1：植山英史、海老名市01713：吉澤 健、座間市01713：新山保が行った。
- ・各記述は「1. 赤星ノートの内容」「2. 記載資料の整理」の2つに大きく分け、1.の細目は[調査（踏査）年月][資料保管場所][記載内容概略]とし、2.は[（遺跡及び）遺物（遺構）概要][掲載図書][掲載図書概略][小結]などとし、資料に応じ該当部分を記載した。
- ・挿図や図版は基本的に作図者のタッチを重視し、赤星氏の図、もしくは実測者の図をそのまま掲載し、写真に関しても同様である。
- ・「赤星ノート」は遺構図では略測図に寸法の数字が記載されるものが多く、遺物図は基本的に原寸に近い図ではあるが、なかにはそれから外れるものも存在するため、縮尺は任意掲載のものが多い。



第1図 対象遺跡位置図

年報番号横浜市 01268-1 瀬戸ヶ谷古墳（9） 横浜市保土ヶ谷区瀬戸ヶ谷

1. 赤星ノートの内容

〔調査（踏査）年月〕 1943・1950年

〔資料保管場所〕 東京国立博物館

〔瀬戸ヶ谷古墳と赤星ノート8〕

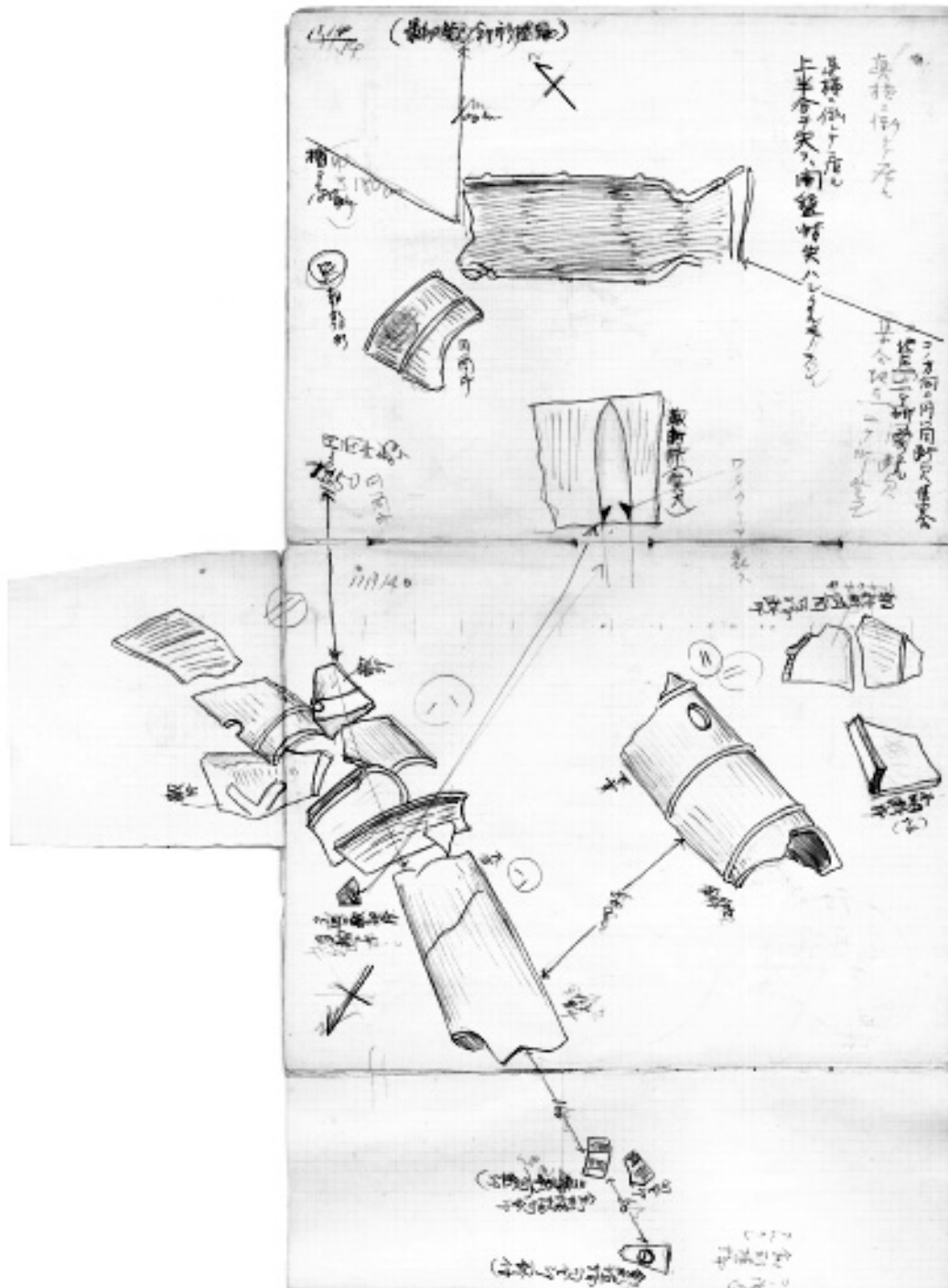
前回から引き続き今回は01268-1（3）の方眼ノートの記載内容について取り上げる。方眼ノートには、埴輪の出土位置と出土状況などが書かれている。今回は埴丘後円部の前方部側東斜面から出土した朝顔形埴輪、円筒埴輪の図が紀要12で紹介した出土状況写真と一致することが判明した。前回、前々回の図の一部には「18年8月11日」「8.11」と記入されており、写真のメモと合わせて昭和18年の調査時の記録として間違いないだろう。今回紹介する第2図には端に「11.14」と記載されており、昭和18年11月14日の記録であると考えられる。

第2図の下頁は一部半紙を繋ぎ合わせて折り込みにしており、赤星氏が位置関係と詳細な出土状況を重視して詳細に記録を作成したことが判る資料である。上頁には朝顔形埴輪を縦割りにした断面状の図が描かれる。メモに「眞横ニ倒レテ居ル 上半部ヲ失ウ開墾時失ワレ●（不明）モノ」との記載があり、倒れた朝顔形埴輪が開墾によって（横位の時の）上半を削り取られた状態で出土した図と考えられる。出土位置については第2図だけでは判別不能だが、第2図上頁には円囲いの「ロ」、下頁には同じ円囲いの「ハ」、「ニ」と記入されている。これは第3図上頁の左下に描かれた埴丘の概略図と、そこに記された円囲いの「イ」、「ハ」、「ロ」に対応するものと考えられる。「ロ」は後円部やや西側に書かれた「ハ」より西側埴端寄りに位置している。第2図上頁では図の上方に向かって100cmに「（最初発見剣形埴輪）」と書かれており、これが第2図下頁の「ハ」一帯の埴輪群に当たると考えられる。

第2図下頁「ハ」は靱形埴輪の出土状況図で、一個体分が潰れて出土したと思われる。「靱片」「靱部」などのメモが書かれ、鏝の表現を上頁に拡大して記載している。これより後円部西側100cm先とさらに50cm先に「剣形埴輪」の破片の略図がみられる。「ニ」は第3図埴丘略図に位置は記載されていないが、方位を合わせて見ると「ハ」との位置関係から「ハ」よりも埴端側に当たり、口縁部、基部を欠いた朝顔形埴輪が描かれる。前回紹介した東側斜面出土の朝顔形埴輪も今回の西側の2個体も、他の埴輪より埴端側で出土している状況が記録されている。

第3図上頁左端には「11.28」の記載があり、昭和18年11月28日の記録と考えられる。「ハ」よりも前方部側及びそれより西南埴端寄りから出土した埴輪片が記載されている。「ハ」より150cm後方部側に円筒片が3片描かれ、それよりさらに150cm後方部側に基点となる「イ」が所在する。円筒3片より100cm埴端側にも円筒5片が描かれ、100cm後円側には「靱破片」、「円筒片」が記載されている。

第3図下頁は「へ」とした家形埴輪出土状況が記載されている。位置は「ハ」から後円部の埴端に向かった点が「ホ」になり、「ホ」の位置から後円部北西側に向けて500cm先と記載されており、略図と方位を合わせると後円部側正面に相当する。本図内にも「後円中心●（不明）点」から「100cm」、「160cm」の記載が認められる。図には家形埴輪の屋根部と考えられる破片、壁面とそこに穿たれた円形スカシ孔、鯉木と思われる円柱状の破片などが描かれている。また、「コノ断片深20cm位」「深（実測）地表ヨリ50cm」「コノ下表土よりー110cm箱形●●アリ」との記載があり、家形埴輪は調査時の表土面から深いところで発見されたことが



第2図 西側斜面埴輪出土状況

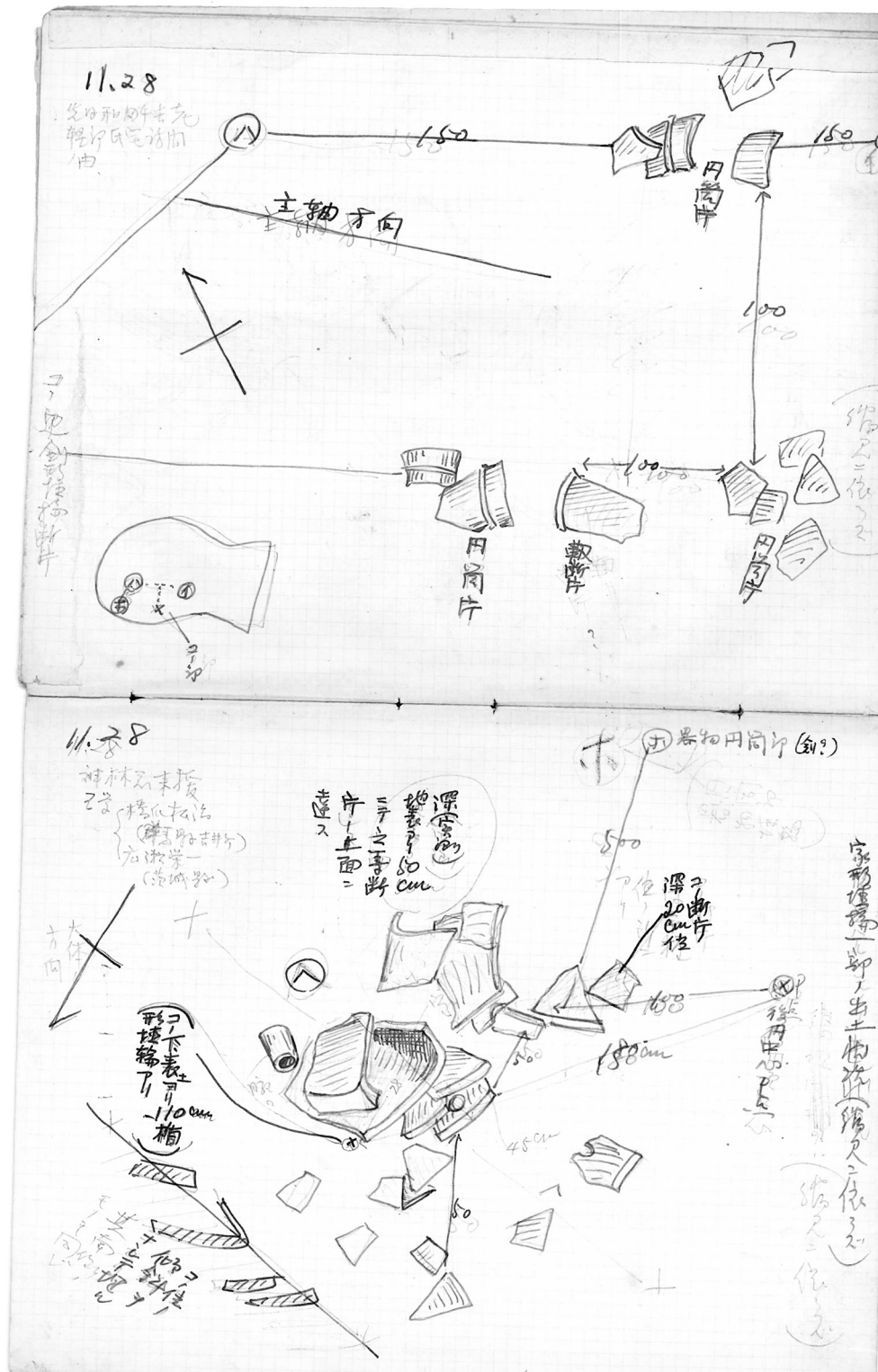
判る。このことから、基底部については原位置を保って埋まっていた可能性が考えられる。

2. 記載内容の整理

本資料では昭和18年調査時の後円部西側から埴輪頂部後円部端側の埴輪出土状況が明らかとなった。特に家形埴輪は、出土状況の記録から基底部は原位置を保っていたと推定され貴重な資料である。 (植山)

[掲載図書]

『神奈川県史』資料編20 考古資料 1979



第3図 埴輪出土位置（上頁）・家形埴輪出土状況（下頁）

【参考文献】

三木文雄「神奈川県瀬戸ヶ谷古墳（1）」『日本考古学協会年報3』昭和30（1955）年 日本考古学協会
石野 映「神奈川県瀬戸ヶ谷古墳（2）」『日本考古学協会年報3』昭和30（1955）年 日本考古学協会

年報番号01602 海老名市 衛生センター脇横穴墓群

1. 赤星ノートの内容

[調査(踏査)年月]

昭和43年3月16日

[資料概略]

資料は海老名市本郷に所在した「衛生センター脇横穴墓群」に係る調査資料と4号横穴墓の清書図版である。

2. 記載資料の整理

[遺跡・資料概要]

衛生センター脇横穴墓群は昭和43年の工事で発見された、海老名市本郷字新宿1番目に位置する横穴墓群である。赤星氏の調査によれば、相模野台地、相模原面の南東側崖線に位置するローム層に5基、さらに東側に2基の横穴墓が確認された。赤星氏の現場所見によれば、横穴墓の全体数は7基以上の可能性が示されるが、現在は全て消滅しており、不明である。遺物の有無は不詳であるが、1～5号横穴墓はそれらの形態から7世紀後半代のものと考えられている。

本資料は当時の横穴墓の配置状況と立地を記載した図面と、横穴墓内の調査を実施した1～5号横穴墓について、中でも1、2、4号横穴墓内の調査メモである(第4～8図)。5基の横穴墓はいずれも平面無袖式で、断面はアーチ形であったとされる。このうち、1、2、4号横穴墓については、奥壁側にのみ円礫が敷かれた棺床が確認されたことが記されている(第7、8図)。中でも残存状況が最も良好な4号横穴墓についてのみ、規模についての記載がある。これによれば、玄室の長さは4.25m、羨門幅85cm、奥壁幅1.9m、奥壁高1.2mを測る。奥壁から1.3mの範囲の床には円礫が敷かれ、天井部は奥壁から60cmは平坦で、そこから羨門部に向かって傾斜し、羨門部では高さ70cmまで下がっていることが記載されている。羨門部にはその形状に合わせて加工した幅85cm、高さ70cmの閉塞石羨門の形状に合わせて加工した凝灰岩製の一枚石を閉塞石としていたことが確認された。1号横穴墓のものと思われる図面には、2号穴と同形、残存状況も同様との記載がある。それらの規模には記載がないが、図面からは奥壁側半分が残存していたことが読み取れる。

[掲載図書]

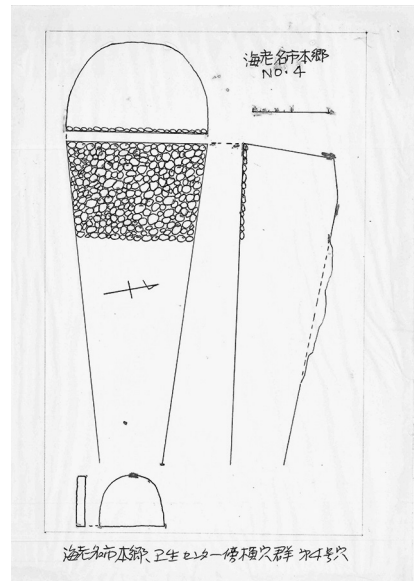
A: 神奈川県県民部県史編纂室 1979 『神奈川県史 資料編20 考古資料』 神奈川県

B: 海老名市 1998 『海老名市史1 資料編 原始・古代』 海老名市

[掲載図書概要]

A: 海老名市『衛生センターわき横穴墓群』に関する記述において、図版649上段に本資料(第4図)が掲載されている。

B: 海老名市史である。本遺跡の記述において、本資料の第5図を清書した図版と第4図が第344・345図と



第4図 衛生センター脇横穴墓群
第4号横穴墓 清書図版

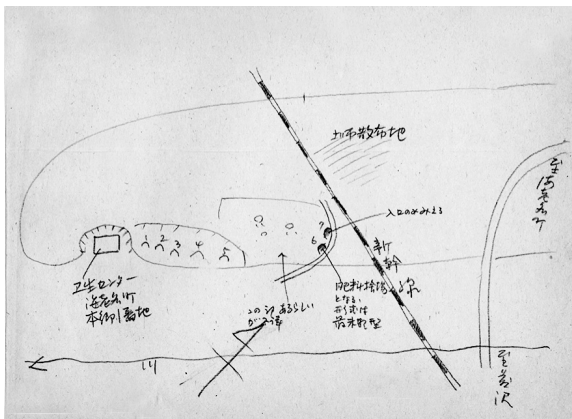
して掲載されている。

3. 小結

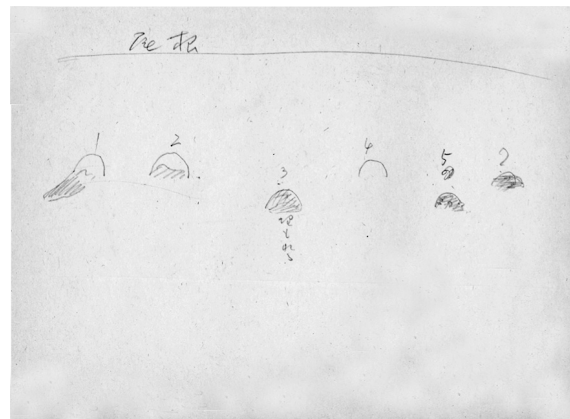
本資料は海老名市衛生センター脇横穴墓群の資料である。調査の後、横穴墓群は消滅したため、本資料の内容からのみその情報を得ることができる、非常に貴重な資料となっている。(吉澤)

【引用・参考文献】

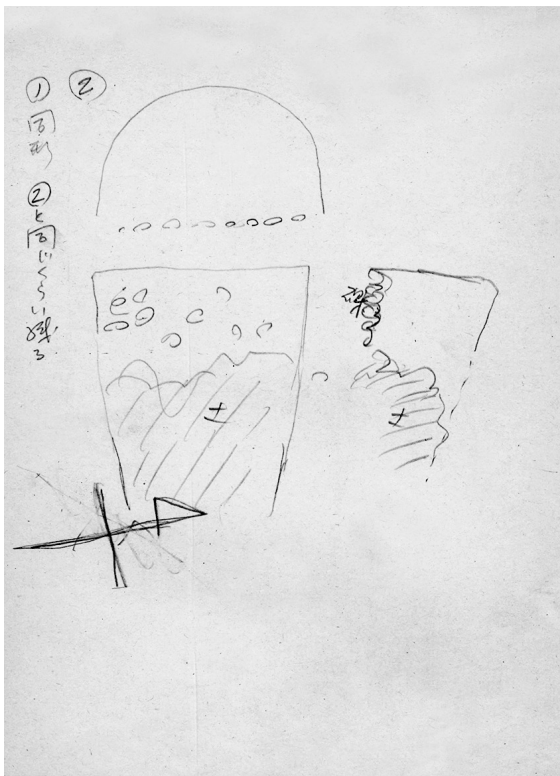
神奈川県県民部県史編纂室 1979 『神奈川県史 資料編20 考古資料』神奈川県
海老名市 1998 『海老名市史1 資料編 原始・古代』海老名市



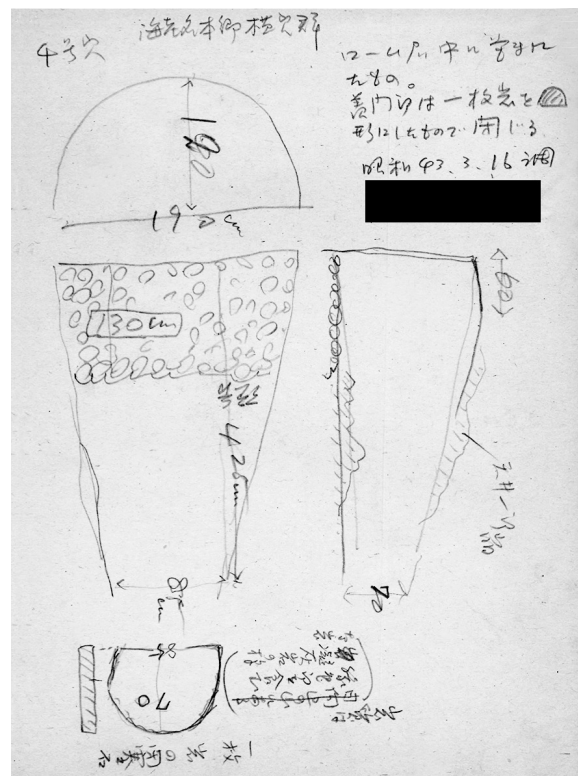
第5図 衛生センター脇横穴墓群配置図1



第6図 衛生センター脇横穴墓群配置図2



第7図 衛生センター脇横穴墓群 第1号横穴墓



第8図 衛生センター脇横穴墓群 第4号横穴墓

年報番号 01713 梨の木坂横穴墓群 座間市入谷小字諏訪の前

1. 赤星ノートの内容

[調査(踏査)年月日]

昭和45年10月・11月

[資料保管場所]

座間市教育委員会に保管されている。

[記載内容概略]

今回紹介する資料は、スケッチ図2枚、実測図1枚、写真3枚で、神奈川県立図書館の封筒に入っている。その他に写真6枚、新聞記事3枚が同封されている。

スケッチには、梨の木坂横穴墓群の位置が記されている。第9図には、梨の木坂横穴墓群の周辺に所在する横穴墓群を総称して、「座間入谷横穴群?」と記載されている。第10図には、「座間梨の木横穴 鈴鹿横穴の南隣」とあり、1号穴からはガラス製丸玉8、金銅製責金具、金銅製鳩目2、須恵器提瓶1、2号穴からはガラス製小玉・丸玉多数、金環2、平根式鉄鏃が出土とあり、昭和45年10月に道路拡張工事で見つかったと記載されている。第12図は須恵器の長頸壺で、口径の内径8.7cm、外径9.3cm、高さ13.8cm、胴部18.4~16cmと計測値が記載されている。写真1は、梨の木坂横穴墓群の全景写真で、3枚の写真が貼り合わされており、パノラマ写真のようになっている。昭和45年11月と記載があり、左端の1号墓に、「埋もれた1基入口は礫で崩れぬようにしてある」と記載されている。写真2には「すべて羨門外が礫で固めてあるという座間町梨の木様横穴群の一穴」と記載されており、写真3には、「座間町梨の木坂横穴群」とあり、写真3・4とは別の横穴墓の写真である。新聞記事は、第1次・第2次の発見記事で、鷹番塚横穴墓の発見の記事も同封されている。

2. 記載資料の整理

[遺構・遺物概要]

発掘調査の概要及び経緯に関しては県史に詳しく記載されている。写真の横穴墓は、すべて羨門部の外側周囲に石積みを持つ横穴墓である。写真1は梨の木坂横穴群の全景写真で、調査前の風景写真である。第1号墓は未掘の横穴墓で、入口付近が礫で覆われているのが見える。写真2は、県史に未掲載の横穴墓で、羨門部に縦長の石を6段程度積み、その上に羨門の石を載せている。羨門周辺には羨門部の石よりも小さな礫を広く積み上げており、羨道部の側面にも同様な小さい礫を積み上げている。新聞記事によると、入口の幅1m、奥壁幅3m、奥行き7mの羽子板形で、直径8mmのガラス玉5個や鉄鏃13本、人骨5体分が荒らされずに出土したと記載されている。写真3は、県史に掲載されている写真よりも引いたアングルで撮影された写真で、羨門周辺に広く石積みが施されている様相がはっきり見える。 (新山)

[掲載図書] 神奈川県県民部県史編集室1979『神奈川県史』資料編20考古資料

[掲載図書概略] 県史に掲載されている図版645と同じ写真も同封されており、須恵器の図面も図版645に掲載されている。

